大岩教授の思い出

荻原浅男

大岩教授の遠逝はわが国文学教室にとって一大痛恨事であるばかりでなく、国語学界、とりわけ方言学界にとっても痛惜にたえないことと思う。故人と私は同年齢で四十九年三月に相携えて定年退官するはずであったのにと思うと、身辺俄かに寂寥を覚える。哀愁襟に満ちて序なしといった気持である。この紙面を借りて在天のみたまに謹んで追悼の意をささげたい。

大岩教授と私との最初の出会いは、今から三十二年も前、昭和十五年の春であった。教授は当時、旧京城帝国大学法文学部の学生として国語学を専攻しておられ、私は同学部の助教授として国文学を担当していた時であった。この年に私は北京師範大学から赴任して来たのである。当時国語国文学の専攻学生は十数人だったと思うが、その中で最年長が大岩教授であった。学生間の噂によると、勉強一点張りで、他の学生たちと遊んだり話し合ったりする事は余りなかったということである。国語学の教授は今は亡き時枝誠記博士であった

が、大岩教授は時枝博士よりも言語学担当の小林英夫博士（当時助教授）に専ら指導を受けておられたようであった。

私の講義には出られなかったが、卒業の口頭試問の時に、麻生磯次博士（前学習院々長）が万葉集の写本を読ませたところ、当時の大岩学生は少しも読めなかったのが今にも印象に残っている。私も祝詞について試問したが、殆んど答えられなかったと記憶している。しかし時枝教授の国語学の試問にはよく答えられたようだった。

京城大学卒業後の大岩教授については、私は殆んど何も知らないで過して来たが、戦後の二十二年の春、千葉師範学校の女子部（四街道校舎）で再び教授にまみえる機会を得た。教授はここの専任教授として勤務され、私は講師として週一回出講していた。この四街道校舎は旧兵舎の建物だったが、教授は狭い北向の屋根裏部屋のようなところに起居され、方言のカードの中に埋もれておられた。週一回、東京の御自宅に帰るとのことだったが、男の自炊生活のためか、その当時から顔色はすぐれなかった。国語学に対する情熱と不屈の精神が、不自由で陰うつな屋根裏生活を克服させたのであろう。

その後、新制の千葉大学が発足し、稲毛に文理学部が新設されると同時に、教授と私はここの専任となり、それ以来、今の西千葉の人文学部に至るまで、同僚教官として親しくおつきあいして来たのである。

大岩教授が不帰の客となった今にして思えば、同僚として教授から学ぶべきことは多大であると痛感する。その脱俗的な生活態度、自己堅持の信念、学問に対する情熱ときびしさ等々は、学究者としては欠くべからざる心得であろう。

人間誰しも生身を持っている以上、愛憎好悪の乱想からのがれることは難しい。大岩教授御自身にしても、また同僚の私にしても時にはこうした乱想に駆られたことは無きにしもあらずだったが、教授の厳粛な死はこうした乱想をすべて浄化し去ってしまう。今の私の心に映る教授は、学問即人生の一路を脇目も振らず、しっかりした足取りで歩んで行く孤高の姿である。

教授は古今集がお好きなようであったので、最後にその歌一首を謹んでみたまにささげて、この思い出の記を終えることにする。

わすれなんと思ふ心のつくからに
ありしよりけにまづぞこひしき

四七・一〇・二

——本学教官——